支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「木造校舎」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

１９５６（昭和31）年生まれの私は、二つの木造校舎に通った。

一つは小学３年生途中までの学校、もう一つが統合して空き家となった元の中学校校舎に移転した次の小学校だ。前の小学校は正面に切り妻屋根の正玄関があり、先生方と来客が出入りした。脇には二宮金次郎像と国旗掲揚塔が立っていた。校舎は東西に延び西校舎へとL字型に配置され、西校舎は風と砂埃を防いでくれた。対称的に東側には渡り廊下で「講堂」があった。「体育館」と呼ぶようになったのは、前中学校校舎に移った後と記憶している。校舎北側に接して小川が流れ、学校用の洗い場があり足を洗った。校舎は高床で小学生は潜り込めるほどで、教室の床の節穴から落ちた消しゴムを拾いに行けた。

校舎は２階建てで、下級生が１階、上級生が２階だった。古い古い校舎で（今調べると、増改築はあったが築90年だったようだ）、ぶらぶらと揺れる階段を上級生が駆け上がっていた。学校の掃除は基本雑巾がけで、１年生（だけだったと思う）の教室に担当の上級生が手伝いに来た。掃除は同時刻に一斉に行うが、たまに行事の関係でクラスによって早く掃除をするときがあった。そこで雑巾用のバケツを倒し水が流れ、１階で授業を受けている下級生教室の天井から水が落ちてきて、雑巾を持った上級生が慌ててやってくることがあった。

さて、自分たちで椅子や机を運んで引っ越しした次の小学校は、２階建ての本校舎に続き、東や南東方向に平屋の給食室、宿直室、理科室、校長室、職員室、保健室、そして渡り廊下でつながれた体育館があった。給食室からは昼前に美味しそうな匂い、保健室からは消毒の匂いが流れた。宿直室には湿った畳が見え、理科室の骨格の人形とホルマリン漬け容器におびえた。職員室の隅では、ガリ版印刷機で１枚１枚ローラーを押す腕カバーした先生がいた。

冬が近づくと窓の外にはブリキの煙突が設置され、教室にはだるまストーブが置かれた。そして寒くなると、学校職員のおじさんが赤々と燃えたタネ炭を、各教室のストーブに配ってくれた。タネ炭にのせる燃料は、校舎北側の小屋から運んだ亜炭だった。

床も壁も天井も、机も椅子も、教室の隅の三角形のごみ箱も、木造だった。あの木目、弾力、肌触り、雑巾で磨かれた光沢、そしていたずらされたナイフの跡が、オルガン伴奏の合唱とともによみがえる。

●あおた・しげお　１９５６年生まれ。福島県相馬市出身。２０１６年５月から仙台建設業協会の専務理事を務める